

2017.9.3 年間第22主日

イエス、死と復活を予告する

マタイ福音書 16章 21-27

(そのとき、) イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。すると、ペテロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」イエスは振り向いてペテロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負つて、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。

説教

1. 受難と復活の予告
2. ペテロ、イエスをいさめる
3. イエス、ペテロを叱る
4. 自分の十字架
5. 自分の命

きょうの福音はこの5つの内容がわかりやすく、かつ深い意味をこめて語られます。

1. <受難と復活の予告>

イエスをつぶしちゃえ、やっつけてしまえ、それが実力者、権力者のやり口

だったということはイエスはさんざん経験してきました。これからはもっとひどくなるだろう、とイエスにはわかるわけです。だから、殺されて三日目に復活するとイエスは予告されました。

2. <ペテロ、イエスをいさめる>

ペテロはイエスに褒められたばかり (16:13-20) なのに、イエスをわきの方につれて行って「そんなメチャクチャをいわないでくれ」なんていいただきます。もっとわたしたちに教えてください、わざわざ殺されに行かないで欲しい、エルサレムなんて行かないでください、という気持ちなのでしょう。

3. <イエス、ペテロを叱る>

イエスはペテロがゴニョゴニョ言っているのをそっぽを向いて聞いていたのでしょうか「振り向いて」ペテロを叱責します。

サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。 (23節)

ペテロは血肉 (ちにく) によらず、イエスの愛、イエスの言葉、イエスの業は神さまから出ているということ身にしみてわかっていました。だからこそ、「あなたはメシア、生ける神の子です」と告白しました。でも、イエスの姿が消えてしまえばおしまいだ、世界の終わりだ、なんとかイエスに生きていてほしい、自分のそばにいてほしい、そういう血肉のほう (ふつうの意味での人間らしい気持ち) にペテロの心が動いたということです。そのペテロの心の動きに対してイエスは「サタンしりぞけ」といいました。

4. <自分の十字架>

自分の十字架を背負え、これは、わたしが私自身の十字架を背負うように、おまえたちもおまえたち自身の、各自の十字架を背負え、それではじめてわたしについて来られる、ということです。イエスについて行くということは、現れてきたイエスの姿につかまって、すがりついて生きていくということではない。それでは本当に生きることにはならない、そうではない、わたしに

従うということは自分の十字架を背負って来なさいということです。自分の十字架？きびしい言い方に聞こえます。すなおで真面目な人は自分の十字架って何だろうかと探し出します。自分の十字架を背負えというイエスの真意はどういうことなのでしょう。

長老、祭司長、律法学者たちとはいったい悪人でしょうか？もともとはモーセの教え＝律法を守り、それぞれの立場から真剣にユダヤの伝統を守ろうとしている人たちです。律法社会を守り発展させるために実力者となり、権力者として世を統治している人たちです。別のいいかたをすれば、善の番人、よりよい世界の羊飼いとさえいえないこともありません。イエスは直接に「長老、祭司長、律法学者たち」を批判するのではなく、ペテロの心の動き、ゆらぎを通して真実を解き明かします。

イエスという神の子、愛の人が世にでてきた。預言者以上のお方が実際目の前にいる。ペテロはその教え聞き、その業を見て、信仰告白をしました。しかし、血肉に支配されイエスに叱責されました。さがれサタン、と。

「さがれサタン」のサタンとは誘惑です、イエスは悪を叱責して、誘惑を退けています。イエスはペテロが誘惑に負けて、迫害者である長老、祭司長、律法学者たちと同じ姿になってしまうことを「あなたはわたしの邪魔をする者」といって叱っているのです。

わたしたちもペテロと同じです。いったんはイエスのことがわかるのです。あなたは神の子とイエスを告白することができます。しかし、そこにはイエスにすがろうという誘惑があります。イエスにすがろう、イエスの十字架に、イエスさま、どうかわたしの元からはなれないで…、イエスはそれを悪魔の誘惑だといいます。わたしに頼るのではなく、自分の十字架を背負ってついてきなさいという「たとえ」で教えてください。自分の十字架を背負いなさいと教えるイエスは、わたしの十字架にすぎるな、と教えています。それでは律法にすぎる過去・現在、むかしと今と同じ間違いをおかすことになる。

5. <自分の命>

イエスを引き止めて、イエスにつかまって、イエスの十字架を盾にとって、そして自分の命を救おうと思う、そういう者は自分の命を失う、とイエスは言います。自分の信仰で自分を救おうと思う者はそれを失う、ということです。自分の決心や度胸で自分の命を立てる、自分の十字架をどうしようと背負う覚悟がある。たとえば、わたしは信仰を貫く、そんな迫害にもくじけない、たとえ殉教によってこの世の命を落としても、永遠の命に生きることを選ぶ。でも、イエスはそれでは自分を失うよ、といます。

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか。

(26 節)

ここでいう命とは生存の命、生きている命のことをさしているのではなく、聖霊によって生きている命のことです。

わたしたちは自分でない者に自分の生命の根っこ、根元があるということ。自分の内部から自分というものを保つのではないことを、イエスのことばをとおして聞き分けることができますように。
